

《書評》

菊池かおり・松永 典子・齋藤 一・大田信良編著

『アール・デコと英国モダニズム——20世紀文化空間のり・デザイン』
(小鳥遊書房、2021年)

Āru-deko to Eikoku modanizumu: Nijusseiki bungaku kūkan no ri-dezain
(*Art deco and English Modernism: Redesigning the Cultural Space in the*
Twentieth Century). Edited by Kikuchi Kaori, Matsunaga Noriko, Saito
Hajime, Ōta Nobuyoshi. Takanashi-shobō, 2021.

本書はイギリスの文学・文化を専門とする5人の研究者が、「アール・デコ」という建築の概念をあらためて歴史から学び、その上で、それが20世紀の社会に与えた影響と、さらに21世紀の現在におけるその可能性を視野に入れて再考しようとする果敢な取り組みが結実したものである。

書名からは、この一冊の中に文学やフェミニズムをめぐる深い思考の過程が収められていることがわかりにくいかもしれない。事実、この書評を依頼された際、現代文学とフェミニズムを専門とする評者に、英国の建築のことなど手に負えるはずがないがどうしたものかと首をかしげたものだ。

しかし一度読み終えてみると、本書は（各研究者がある共通のテーマのもとにそれぞれに執筆した論文を寄せ集めたものとしての）論集というよりはむしろ、英国文化にとって重要な歴史・文化的概念である「アール・デコ」が、ただ建築の領域にとどまるものではまったくなく、英国モダニズム研究にとって有効な新たな切り口であることを痛感させられた。そして、その結果として、人類にとって特別な発展と二つの大きな戦争を体験する百年となった20世紀をより深く理解するために、この建築概念が機能するのではないかという可能性

を信じた論者たちが、それぞれの持ち場をそれぞれに拡張しながら、共同作業によって建築物を建てるように造り上げたことがわかる。アール・デコが執筆者たち「みんなの夢」となっているかのような不思議な、感動的な印象が残る読後感であった。インターメッツォの三本の論考も、決して装飾的な役割を果たしているわけではなく、まるで第1部と第2部を補強する太い梁のようだ。本書じたいが、ひとつの時空間を約束する物語のようにも構成されており、二度、三度と読み返すと、その都度新たな発見がある。以下が本書の構成である。

序章 20世紀文化空間を、今一度、考える——アール・デコと英国モダニズム
菊池かおり

【第1部】アール・デコ時代の英国モダニズム

はじめに モダニティ論以降のポストモダニズム、あるいは、「大衆ユートピアの夢」を「ポスト冷戦」の現在において再考するために 大田信良

第1章 モダニズム建築の抑圧とアール・デコの可能性 菊池かおり

第2章 英国アール・デコ時代のシスターフッドの夢——フェミニストのインフラと斜塔作家のモノ 松永典子

第3章 文学とアール・デコ——雑誌『ホライズン』とH・E・ベイツ「橋」を中心に 齋藤 一

第1部の結語 アール・デコ期の英国モダニズムにみられるダイナミズム
菊池かおり

【インターメッツォ】モダニティのさまざまな空間性・時間性

第4章 スコットランドと都市計画者の20世紀——Patrick Geddesの植民地なき帝国主義 高田英和

第5章 ポスト・戦争国家「イギリス」と消費文化のグローバリゼーション 吉田直希

第6章 『あるびよん——英文化総合誌』から再考するヘルス・ケアと（英語）教育 大道千穂・大田信良

【第2部】20世紀文化空間のリ・デザインとグローバル化するアール・デコ	
第7章	リ・デザインされる美しさ——ロマンスと生殖とケア 大谷伴子
第8章	人びとの夢の世界を阻むもの、あるいは、21世紀のアール・デコ論のために——大衆ユートピアの夢とフェミニズム 松永典子
第9章	ポストモダニズム建築の多元性とその可能性 菊池かおり
終章	エクセントリックな英国モダニズム研究 齋藤 一

お分かりになるかと思うが、建築や文学の枠におさまらない非常に広い視野の論集となっており、中身をざっと紹介するなどというのは無礼にあたるのだが、これから本書を手にする方のためにまずは概略をご紹介したいと思う（以下敬称略）。

まず菊池かおりによる序章（7-18）では、吉見俊哉・姜尚中による「20世紀空間」（『グローバル化の遠近法——新しい公共空間を求めて』岩波書店、2001年）を下敷きにして、「20世紀文化空間」というキーワードが提示される。構造やシステムといった主体的な意志をもつものではなく、矛盾や無秩序があっても破綻せず存在可能な場が、アール・デコを媒介にして浮かび上がるというのだ。ここでは、文学研究ですでに古めいた感のある「空間」という概念を、その主観性によって再び21世紀の表舞台に引出し、「システム」とは異なる多様性を許容するものとして意義づけるという魅惑的な意図が表明されている。

第1部は、2018年に開催された日本ヴァージニア・ウルフ協会第38回全国大会でのシンポジウム「アール・デコ時代の英国モダニズム」が元になっており、そのためか、4人の論者のテキストは自立していながら相互に対話的だ。大田信良による「はじめに」（21-25）は、そのシンポジウムの要旨として執筆されたものであり、アール・デコ時代に英国の文学や文化がどのように対応したのかという問題提起がここでなされる。そして菊池かおりによる第1章「モダニズム建築の抑圧とアール・デコの可能性」（27-43）では、ジェンダーやセ

クシュアリティという視点を交えながら、アール・デコとモダニズム建築の関係性を見ていき、モダニズム研究におけるアール・デコの可能性を探る。そのとき、アール・デコの「女性性」、あるいは享楽性といったものを排除しようとするモダニズム建築の「男性性」が明るみに出されていく。松永典子による第2章「英国アール・デコ時代のシスターフッドの夢——フェミニストのインフラと斜塔作家のモノ」(45-64)では、菊池の論を文学の場で引き継ぐように、英国の男性モダニスト作家たちとヴァージニア・ウルフとの関係を捉えなおすという興味深い試みが行われている。さらに、齋藤一による第3章「文学とアール・デコ——雑誌『ホライズン』とH・E・ベイツ「橋」を中心に」(65-79)では、菊池と松永が論じてきたアール・デコの媒介性と包括性を踏まえて、1940年に創刊された雑誌『ホライズン』と、そこに掲載されたH・E・ベイツの短編小説「橋」を論じるという、より具体的な対象の分析が行われている。第1部の結語で菊池が述べているように、これらの三つの章を読み進めていくことで、アール・デコ期の英国モダニズム研究が、ジェンダーの視点を獲得して、既存の関係性の読み直しと再意味付けを可能とし、資本主義社会と共産主義社会の接続点さえ見えてくるのである。このときわれわれは、20世紀をとおして「東西」の「冷戦」という二項対立で安易に世界を理解しようとしていた姿勢がとうに終わっていることを感じざるをえない。

インターメッツォでは、高田英和による20世紀英国の都市計画について(89-116)、吉田直希の戦争国家としてのイギリスと消費文化論との関係をめぐる歴史論(117-144)、そして、大道千穂・大田信良は、イギリス文化研究誌『あるびよん』の意義を問うている(145-184、評者はお恥ずかしながらこの雑誌の存在すら知らなかったのだが、とても興味をもった)。

第2部では各論者の視野がより広範なものになる。大谷伴子による第7章「リ・デザインされる美しさ——ロマンスと生殖とケア」(187-216)では、ビューティ産業の歴史という非常に魅力的な観点から、アール・デコ期に「美しさ」が社会空間においてリ・デザインされ、消費社会に流通していく過程を確

認することができる。第8章「人びとの夢の世界を阻むもの、あるいは、21世紀のアール・デコ論のために——大衆ユートピアの夢とフェミニズム」(217-250)で松永は、第1部の論と思考を継続させながら、大衆ユートピアの夢の共存とみなされうるアール・デコという概念が、フェミニズムのような現代の現象に有効たりえるかを問うている。最終章は菊池の「ポストモダニズム建築の多元性とその可能性」(251-280)で、チャールズ・ジェンクスによるモダニズム建築とポストモダニズム建築をめぐる問いを起点として、後者の意味と可能性を探っていく。終章「エクセントリックな英国モダニズム研究」(281-293)で齋藤一は、本書が生まれる経緯と、本研究の意義、概要を解説しながら、みずからの試みを「エクセントリック」と呼び、この研究の脱中心的性質のダイナミズムを再確認している。

このような精力的かつ大きな研究への取り組みについて、専門を異にする者がここですべてを語り尽くすことは不可能だ。しかし、本書を構成する論考はすべて一貫したテーマに貫かれており、それらが孕む問題にも研究テーマの斬新さや伴うリスクにも共通するものがあることは確かだろう。したがって本稿では、とりわけフェミニズムのテーマにコミットしている論文を取りあげながら拙い印象を記しておきたいと思う。

第1章の菊池論文では、本書の要であり、われわれがこれまで建築用語として認識してきた「アール・デコ」とはいったい何なのかが説明される。それによれば、1910年代から20年代のフランス装飾芸術を指し示す《a style label》として、1966年にパリで開催された回顧展「『25』年代：アール・デコ/バウハウス/スタイル/エスプリ・ヌーヴォー」で用いられ、その後、バウハウスやスタイル、エスプリ・ヌーヴォーとの違いを明確にするものとなったのだという(30)。大量生産向きの装飾であるアール・デコは、その意味ではモダニズム建築の理念と矛盾するものではなかったのだが、しかしまさにそのことによって、大衆的なものと同一視されたくないと感じたル・コルビュジエらの

嫌悪を増長させもしたのでだろう。さらに、そうした男性エリートたちに牽引されたモダニズムが、「女性性」をもつ性質ゆえにアール・デコとの切断をはかることで、建築やデザインというジャンルにジェンダーの差異化が生じるのである。ここには20世紀に拡大した消費社会や大衆文化というものが、市場を席捲しながらも、ハイカルチャーの立場からは蔑視され、それがそのまま男性による女性への侮蔑に相通するものであったことがわかる。

そうした時代に文学の世界ではヴァージニア・ウルフが奮闘することになる。これについての第2章松永論文は面白い。オーデン・グループに代表されるような英国の男性モダニスト作家・詩人たちと、フェミニストとして知られる女性作家のヴァージニア・ウルフが文壇で論争を展開してはいたが、双方ともに「大衆ユートピアの夢」を秘めていたのだという。しかしそもそも、エリート知識人たる男性作家たちもウルフも「労働者」と呼ばれる階級は視野に入っていなかった。けれどもその議論の中でウルフにはある変化が生じていく。

ペニー・スパークの消費文化論 (Sparke, Penny. *As Long as It's Pink: The Sexual Politics of Taste*. Pandora, 1996) を引いて説明がはじまるアール・デコとジェンダーの関係についての記述には惹き込まれるものがある (54)。まず近代化によって、女の領域は「家庭」「道徳・社会的な望み、趣味や装飾の実行」など「感情的な環境」へ、一方で男の領域は「労働・進歩・技術・実用という合理的な世界」へと精神的にも物理的にも分かれたれ、さらに生産が重視される時代だったために女の領域は周縁化されていってしまう。モノの生産者である男性にたいし、女性を消費者とすることで、モノ文化がジェンダーの不均衡を内包し、それだけでなく表象するようにもなるのである。ル・コルビュジエに代表されるモダニズム建築の時代は、建築家自身がそうであったように、モノの装飾性を知的でない快樂的な娯楽の属性とみなし、その上でそれを女性の消費物とし、男性の創作物と差別化していたのだった。

そんななかでウルフは、女性を排除しようとするエリートたちの言説と闘うのである (いうまでもなく“言葉”で)。そうして、モノではなくシスターフ

ッド＝インフラの構築に希望を見いだした。それは「ジェンダー・教育・階級を再考する公共性」(60)であり、その具現としての公共図書館というかたちをとる。女性たちに作り手たれと「書く」ことを促すウルフが、女性たちのなかに未来の創作者、生産者を見いだしていたことがわかる。このように、「アール・デコ」という概念とヴァージニア・ウルフの言説を重ねると、モダニズムが孕むジェンダーの非対称がたちまち露わになるのである。

こうした松永の思考は、第2部第8章の論へとつながっていく。20世紀のモダニズム再考に機能した「アール・デコ」という概念の可能性を、今度は21世紀のポストフェミニズム研究に求めようというのだ。8章の論文が『ハリー・ポッター』シリーズの作者である作家J・K・ローリングのTERF発言からはじまるように(217)、われわれが生きる21世紀のフェミニズムは、百年前のそれとは性質を異にしている側面が大きい。解決した問題点もあれば、新たな問題も生じており、フェミニズム運動は永久に続けなければならないのかという絶望を感じることもしばしばだ。

この論考では、1990年代から2010年代前半という世紀の境界を含む社会の変化期に、アカデミズムの世界では「女とは誰か」という根源的な問いをはじめとしてフェミニズムに対する疑義が呈された一方で、女性たちが直面する諸問題(家庭内暴力、ハラスメント、賃金の不平等など)が女性誌などで取り上げられることによってポピュラー化し、普及していくという「ねじれ現象」(＝ポストフェミニズム)を生み、第二派フェミニズムとの断絶を生んだことが示される(219-220)。さらにポストフェミニズムは新自由主義の影響を受け、アメリカを中心として個人の成功、個人の夢の実現が目指され、女性たちも分断されてしまったのだという。新自由主義的な文化の中で女性の成功者が現れ、その結果としてトランスジェンダー排除言説も生まれたというのである。

こうした思考は、第7章の大谷論文にも通じると考えてよいだろう。女性たちの個人としての幸せは、各自が自分をブラッシュアップすることで手にできるという考え方は、消費文化の中で大衆のものとなり、ある種の正当性を獲得し

たようにも思える（現在の日本における脱毛や美白の過剰な広告を想起させもする）。大谷は、20世紀になってビューティ産業、ビューティケア用品が大衆へも普及し、「美しさ」が誰にでも手の届く「大衆の夢」となった歴史を紐解いていく。戦間期にそうした大衆ユートピアの文化が、ヨーロッパからアメリカへと中心を移したことは、美にかかわる文化の大衆化をさらに加速したのではないだろうか（たとえば、映画産業も同じ道をたどっている）。

20世紀の映像技術やメディアの著しい発展を通して、ビジュアルなイメージを瞬時にして世界中へと発信できるようになったことで、美しさをめぐる価値観はいみじくも画一化された部分がある。ジェンダーの問題がクローズアップされてきた21世紀には、美しさの基準の大きな転換があったはずであるし、そもそも「基準」の存在じたいが問われるべきものとなったはずだ。これに続く考察を期待している。

最後に、評者の専門はロシアの現代文学であり、英国文化という視点から世界を見ることのできる読書体験は非常に新鮮なものだった。すべての論者に感謝を申し上げたい。ヴァージニア・ウルフはかねてより愛読している作家であり、実は非会員ながらヴァージニア・ウルフ協会の大会にも何度か参加させていただいたことがある（残念ながら38回大会は機会を逃してしまっていた）。ビッグネームとはいえ、一人の作家の名を冠した協会にあれほど多くの参加者が顔を合わせることができることに当初は驚いたことを思いだし、本書を読むことで、日本における英国文化・文学研究の層の厚みにあらためて敬服した次第である。文学研究は孤独な作業だと納得しつつも、こうした共同研究の豊かな果実を目の当たりにして、研究というもののポリフォニックな対話性の意義を教えていただいた。